

論文要旨

【目的】 看護小規模多機能型居宅介護(以下:看多機)は、「通いサービス」、「訪問サービス(訪問看護・訪問介護)」及び「宿泊サービス」の3サービスを一つの事業所で一元管理し、療養者の変化に合わせて柔軟にサービスを提供するものであり、在宅療養支援において効果を上げている。本研究の目的は、看多機事業所において提供される看護実践の構成要素を明らかにすることである。

【方法】 看多機事業所の看護管理者4名を対象に面接調査を行い、優れた看護実践が実現できたと手ごたえを感じた事例を合計8事例収集した。看護実践を「状況把握と解釈」、「行動」、「看護実践の効果に対する認識」の3段階で捉え質的帰納的分析を行った。個別事例分析後、その結果を基に全事例を分析し、看多機事業所において提供される看護実践の構成要素を記述した。

【結果】 8事例の分析の結果、看多機事業所で提供される看護実践は、療養過程の以下の3つの状況で異なることが明らかになった。①看多機利用を始めるまでの状況、②身体状況の安定化を図り在宅療養生活を継続させる状況、③看取りや在宅療養生活継続が困難な状況である。①の状況における看護実践の構成要素は、【療養者と介護者及び療養環境の状況から今後の療養の困難さを予測する】等の4の状況把握と解釈、【在宅療養を可能とするための社会資源として看多機利用を提案する】等の3の行動、そして【介護者は在宅療養の見通しを持ち看多機を利用することを決意した】の看護実践の評価であった。②の状況における看護実践の構成要素は、【療養者らしい療養生活継続のため療養者と介護者の能力を活用した生活援助の必要性を認識する】等の9の状況把握と解釈、【療養者の潜在能力を引き出し療養に対する自律性を高める働きかけを行う】等の8の行動、そして【身体症状が改善に向かい在宅療養生活が継続した】等の7の看護実践の評価であった。③の状況における看護実践の構成要素は、【療養者と介護者の意思決定を支える方法を考える】等の10の状況把握と解釈、【療養者と介護者が療養の方向性を決断できるように支援する】、【看取りケアに向けたケア提供体制を関係者全員で協働し作りあげる】等の5の行動、そして【療養者と介護者の望み通りの穏やかな最期を迎えた】等の6の看護実践の評価が含まれた。

【結論】 看多機事業所で提供される看護実践の構成要素は、療養者と介護者及び環境に対する包括的理解によって在宅療養の可能性を探り、エンパワーし、多職種協働で生活を支援し、最期まで自宅で暮らすことを実現するものであった。本研究の知見は、地域包括ケアで看護職に求められる看護実践であると考えられる。